湘南鎌倉医療大学

「“島嶼看護”必須なのは本学だけ」

平島・名瀬病院副院長ら離島の医療者が講義

湘南鎌倉医療大学（神奈川県）は８月９日から２週間、看護学部４年生を対象に島嶼看護をテーマとした集中講義を実施した。メイン講義日の８月17日には、名瀬徳洲会病院（鹿児島県）の平島修副院長（総合内科医）、徳之島徳洲会病院（鹿児島県）の繁田明美・看護部長ら離島で活動する医療従事者が講師として登壇、限られた医療資源のなかで島民の命と暮らしを支える“現場のリアル”を伝えた。荒賀直子学長は「島嶼看護が必修科目として学べる看護大学は全国でも本学だけです」とアピール。



島嶼看護や災害看護などのカリキュラムを設ける湘南鎌倉医療大学



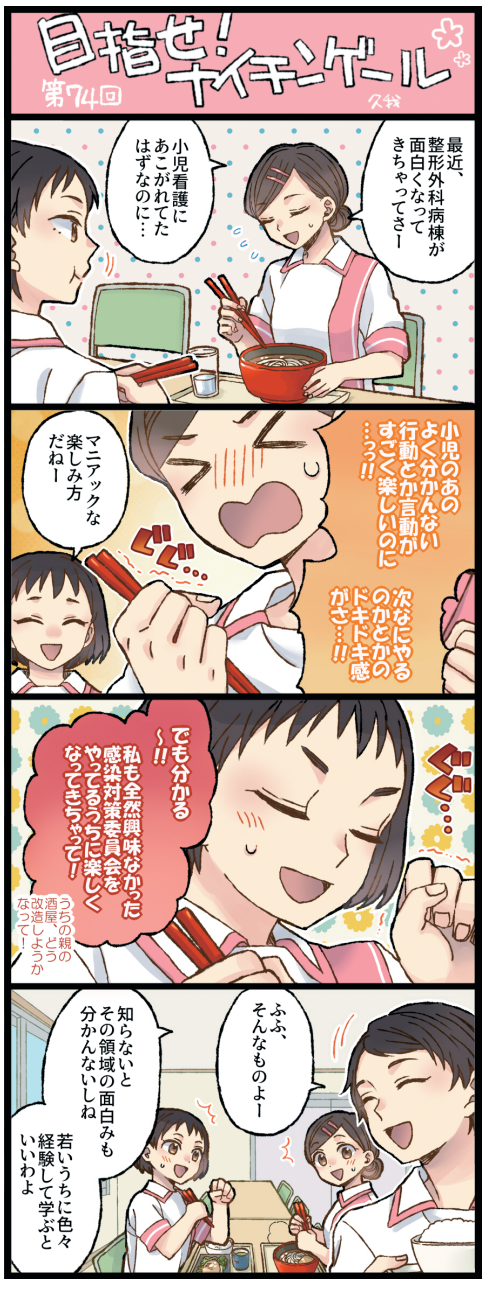
遠隔診療や専門チームにより「島内で支える医療が大切」と平島副院長

集中講義は看護学部４年生のカリキュラムに組み込まれ、例年、２週間15コマ行う。“アクティブラーニング”形式（学習者の能動的な参加を取り入れた学習法）で構成し、序盤の講義では学生が離島医療について調べ、奄美群島の瀬戸内徳洲会病院や徳之島病院にオンラインインタビューを行い、疑問点を整理する。そのうえで、中盤に離島医療に関する講義を受け、最後にテストを行い、島嶼看護について理解を深める。自治医科大学看護学部の青木さぎ里講師が講義責任者を務めた。

中盤の講義は従来、離島の医療機関に勤めていた医師が講師を務めていたが、よりリアルな情報を学生に伝えるために、昨年度、現役で離島医療に携わる平島副院長を講師として招聘。好評を博したことから、引き続き講師を依頼した。

「患者さんの生活背景に寄り添い総合的視点でのアプローチが要」

今年度は、平島副院長ら３人による講義とパネルディスカッションを青木講師も交え実施。まず平島副院長が奄美群島の医療の現状を解説し、鹿児島県全体では医師数が確保されているように見えても、離島では医師の偏在と専門医不足が深刻な状況にあると指摘した。また、島内で医療が完結できない場合、ドクターヘリによる島外搬送となるが、天候不良や重複要請でヘリがキャンセルになるといった課題があることも説明した。



平島副院長は、こうした「患者さんを運ぶ医療」だけでなく、「遠隔診療や専門チームを島に運ぶ医療」を組み合わせることで、島の医療を支える取り組みを説明。徳洲会グループはホンダジェット「徳洲ジェット」を用いた患者搬送を行っており、そのプロジェクトリーダーも平島副院長が務めている。

「治療を目的とした本土の都市部医療機関への搬送や、都市部医療機関での治療を終え、故郷の島に戻る帰島支援など“空の救急車”としての活用が広がっています」と平島副院長。看護師が数カ月単位で離島医療を体験する離島看護師支援プロジェクト「結の島ナース」なども紹介した。

最後に学生へのメッセージとして、「（島嶼看護は）マニュアルだけに頼らず患者さんの生活背景に寄り添い、つねに自分の考えや対応について問いかけながら、総合的な視点で患者さんにアプローチすることが大切です」と呼びかけた。

繁田・看護部長は、自院が島内で唯一分娩を扱う拠点として、周産期医療と母子保健の実際を報告した。徳之島は合計特殊出生率が全国トップの「子宝の島」で、地域全体で子どもを育てる文化があると説明。「ハイリスクの妊産婦や新生児への対応は、島外搬送となり、ドクターヘリや自衛隊ヘリなどを使い分けています」と繁田・看護部長。

夜間の緊急輸血に備え、職員の血液型リストを作成し献血に協力する体制など、離島ならではの備えについても披露。産後も地域全体で母子を見守り、家族と顔の見える関係を築けることが島の医療の魅力と強調した。

トカラ列島などで訪問看護に携わってきた徳洲会外のリニエ訪問看護ステーション鹿児島・大隅サービス事業本部の末永真由美・看護副部長は、物品も限られる離島の環境下で、島にある木材でつくった松葉づえを用い、末期がんの患者さんの暮らしを支えた事例などを紹介。「島にあるものを最大限に生かして暮らしと人をつなぐことが島嶼看護の原点です」と説いた。

「5年後でも10年後でもいいので離島に来てくれたらうれしいです！」

後半のパネルディスカッションでは、前半の講義後に募った学生からの質問に答える形で実施。４人の講師がパネリストとなり、学生らと離島で働くやりがいや課題を語り合った。パネリストからは、島の方々と”顔の見える関係“を築くことができ、そのぶんやりがいや手応えを感じやすい一方、全国的な少子高齢化のなかで離島の人手不足がより深刻化している課題を指摘する場面もあり、「結の島ナース」などを活用したお試し勤務や多様な人材の受け入れ、医療職・行政・住民が一体となった地域包括ケアの構築が鍵になるとの結論に、学生たちは納得した様子だった。

学生との活発な議論を終え、繁田・看護部長は「5年後でも10年後でもいいので、興味があれば離島の現場に来てくれたらうれしいです」とエールを送った。

湘南鎌倉医療大学は鎌倉市山崎に2020年４月に開学。「生命だけは平等である」という建学の理念の下、看護学部看護学科（1学年定員100人）を設け、島嶼看護や災害看護、離島での体験学習など、徳洲会グループがバックアップする大学ならではのカリキュラムを掲げている。荒賀学長は「島嶼看護が必修科目として学べる看護大学は、全国でも本学だけです」と、離島・へき地医療への貢献につながる大学の特色とアピール。

24年３月には１期生97人が看護学部を卒業。２期生（25年３月卒）は就職希望者95人全員が内定し、内定率100%を達成した。卒業生の半数は徳洲会グループ病院・施設に入職し、離島・へき地を含む全国で活躍している。22年には大学院（看護学研究科看護学専攻博士前期課程）も設け、より高度な看護実践力をもつ人材の育成を進めている。

湘南鎌倉医療大学のホームページはここから

中部徳洲会病院

「おでかけ健康講座」が好評を博し4000回超



曽根看護師を中心に年200回以上講演

中部徳洲会病院（沖縄県）が20年以上前から実践している「おでかけ健康講座」が4,000回を超えた。同院の職員が学校や自治会、企業などに出向いて健康に関する知識を伝える取り組み。主に平日に行い、受講者は累計25～30万人に上る。今年度も４～８月の５カ月間で約1万人が受講するなど好評だ。

開始当初から講師を担ってきたのが曽根史郎看護師。一次救命処置（BLS）やAED（自動体外式除細動器）の使い方、食物アレルギーへのエピペン（補助治療剤）の使用法、窒息時の異物除去など、一般の方も正しくできるような緊急時対応方法を、人形を用いて指導する。曽根看護師は、とくに学校に勤務する養護教諭がひとりで数百人の児童・生徒に対応している現状を指摘し、「教職員全員が一丸となって動ける体制づくりが大切です。そのためにも継続したい」と話す。

昨年12月からは、喜多洋嗣薬剤師も講師として活動。「診察室では聞けない健康の話」と題し、主に高齢の方々へ、服薬の仕組みや二次検診の大切さを伝えている。「地域の方々が未病（健康と病気の間にある状態）に向き合い、自身の健康について考える機会になれば」と喜多薬剤師。

最近は、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の救急医らの著書『学校ER』を参考書として受講者に紹介するなど、「徳洲会グループ病院の救急チームとも連携していきたい」（曽根看護師）と意欲的だ。

AIの活用をテーマにSNS勉強会

徳洲会広報部会が開催



全国から32施設が参加しSNSのノウハウを共有

徳洲会広報部会SNS分科会は８月26日、オンラインで第11回SNS勉強会を開催した。全国の徳洲会グループ32施設から広報担当者らが参加し、SNSの活用事例や生成AIの運用方法について理解を深めた。

事例発表では、まず出雲徳洲会病院（島根県）の松村一志・広報室主任が、１人体制での広報室立ち上げやデザインツールの活用、広報誌とホームページ、SNSの連携による内製化の推進や課題を発表。続いて、名古屋徳洲会総合病院の大井幹久・地域連携室職員が、健康友の会会員向けに公式LINEを運用し、イベント通知や即時情報発信による会員との交流深化、郵送コスト削減の成果を紹介した。

続いて、同分科会長である湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の町田詩織マーケティング課主任が「SNSにおけるAIの活用法」をテーマに講義した。投稿ネタの発掘や文章作成、校正チェックでの生成AIの有効性を解説。プロンプト（指示文）を具体的に入力することの重要性を強調する一方、個人情報の入力禁止や医療広告ガイドラインの順守、最終的な人の目の確認が不可欠と呼びかけた。

質疑応答では、SNS投稿にかかる時間や兼務の課題など活発な意見交換を行い、グループ全体でノウハウを共有した。